

氏 名	南出 倫子
学 位 の 種 類	博 士 (美 術)
学 位 記 番 号	乙 第 5 号
学 位 授 与 日	令和7年3月12日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
論 文 題 目	里地里山の景観における視点場の環境デザインと屋外 共空間への応用—アートイベント「たんねのあかり」の 実践を通じて
審 査 委 員	主査 女子美術大学大学院教授 横 山 勝 樹 副査 女子美術大学大学院教授 大 崎 綾 子 副査 森林研究・整備機構森林総合研究所研究員 高 山 範 理

内 容 の 要 旨

本研究は、質的向上を目指した、都市部の使われる屋外公共空間を計画するために、アートイベント「たんねのあかり」の実践から得られた調査と分析内容を研究対象事例として、里地里山の景観における視点場の環境デザインが、どのように屋外公共空間の環境デザインに応用することができるのかを検証することを目的とした。「視点場」とは、視対象を眺める人の位置である視点の周囲の空間や状況であり^{1)、2)}、「視対象」とは、視点から眺められる対象である。「たんねのあかり」とは、新潟県柏崎市谷根（たんね）地区の里地里山を舞台に、2009年から2018年まで、谷根地区の地域住民と女子美術大学の教員と学生らが地域と大学で協働して実施した、アート作品の展示や空間演出を行った屋外イベントである。

第1章序論では、屋外公共空間の景観と課題、および「たんねのあかり」の活動が展開した経緯について述べた。近年、日本の都市部を中心に、横浜市関内エリアの日本大通りのように、屋外公共空間を地域資源の一つと捉え、より積極的に活用して地域の価値向上へとつなげていく、街路や都市公園などの公共空間活用の動向が活発になっている。「地域資源」とは、地域内に存在する資源であり、地域の自然、歴史、伝統、文化などの有形、無形のあらゆる要素を指す³⁾。屋外公共空間は、地域住民と来訪者などの多様な利用者が屋外活動を行う場所である。したがって、さまざまな利用者を想定した環境デザインの計画には、対象場所の現状把握のために、景観の観察と聞き取り調査によるフィールドワーク調査が有効な手段の一つであるといえる。このような背景から、環境デザイン分野におけるフィールドワーク調査の重要性を探るために開始した地域と大学の協働による活動が、「たんねのあかり」の活動へと展開した。

第2章では、研究対象地とした新潟県柏崎市谷根地区中心部について、文献調査とフィールドワーク調査をもとに地域の特徴を把握した。屋外公共空間を計画する場合、さまざま

まな利用者を想定するため、都市部とは異なる地域の事例として、里地里山の谷根地区を研究対象地とした。谷根地区中心部は米山の裾に位置し、谷根川を中心とした低地と丘陵地に、田んぼや棚田、暮らしの場が集中する農村景観の基本構造をもった特徴的な地形である。農村景観の基本構造は、「田の広がる平場、田に水を供給する山、それらの間の山際の集落⁴⁾」によって形成される。地区の高台に位置する神社と寺院を拠点として、かつての生業であった稲作に関連した谷根神社の春祭りといった祭祀や、谷根大和舞といった地域芸能などの地域文化が根付いている。おもな生業が稲作であったことから、大雨や雪どけ水による増水などの自然災害への対策を含む谷根川との関わりが、日々の生活の中で重要であった。また、谷根川に架かる橋梁は東西の地域をつなぎ、橋上空間は春祭りの際の悪魔祓いの舞の舞台になるなど、祭事にも利用される地域文化と暮らしに欠かせない場所である。

本研究では、谷根地区中心部を対象地として、谷根地区の地域住民と女子美術大学の教員と学生らとの協働による「たんねのあかり」の活動を通じて得られた情報を分析の対象とした。分析は、分析-1「たんねのあかり」開催年ごとの使用場所⁵⁾と見学ルートの経路形状の比較(第3章)、分析-2「たんねのあかり」における「選定場所⁶⁾」と「視点場」の類型抽出(第4章)の二部構成とした。

第3章分析-1では、(1)開催年ごとの使用場所の位置と特徴の把握、(2)開催年ごとの見学ルートの経路形状の比較と分析を行った。(1)では、使用場所を特徴づける文化的要素を抽出し、これらの要素は「①稲作文化に関わるもの」、「②神社と寺院」、「③地域の文化や信仰に関わるもの」、「④地域のコミュニティと文化形成に関わるもの」の4つに分類された。(2)では、開催年ごとの見学ルートの経路形状を地図上に示して比較を行った。開催年ごとの見学ルートの経路形状を抽出し、見学ルートの特徴から分類を行った。第一に、見学ルートは経路形状の特徴から、谷根川を中心とした「回遊型」、棚田(鉄塔下)の中央の道路を用いた「中通路型」、谷根川と棚田(鉄塔下)の双方のタイプを組み合わせた「回遊・中通路型」の3つのタイプに分類されることがわかった。第二に、見学ルートの距離と形状の分析から、ショートカットルートがある場合、利用者の経路の選択肢と行動の自由度が増し、歩行動線の回遊性が高まることがわかった。第三に、見学ルートの起点と終点の位置は、滞留空間となる使用場所に多く設定されたことがわかった。「たんねのあかり」の見学ルートの特徴は、起点と終点を同一地点として、谷根地区中心部に点在する使用場所を巡る、おもに回遊性のある経路であったことが確認できた。

第4章分析-2では、(1)「たんねのあかり」の空間演出の対象となる場所の選定、(2)「たんねのあかり」の選定場所の特徴の分析項目の設定、(3)「選定場所」の類型と分析、(4)「視点場」の類型と地域の固有性の分析を行った。(1)では、「たんねのあかり」の候補場所⁷⁾の分析を行った。候補場所は、生活拠点となる場所や地域の文化や個性を形成する要素によって構成された65か所であった。候補場所65か所から、イベント時の実用性から定められた3つの条件(①イベント対象エリア内に位置すること、②イベント時に占有可能な場所であること、③施工可能な場所であること)を満たしたものとして、選定場所46か所が設定された。(2)では、選定場所の分析項目を設定した。空間の特徴から設定した分析項目は、「a. 高低差」、「b. 空間の広がり」、「c. 奥行き」、「d. 曲線形状」、「e. 囲繞感⁸⁾」とした。景観の特徴から設定した分析項目は、「f. 見晴らし」、「g. 見通し」、「h. 見え隠れ⁹⁾」、「i. 文化的意味」とした。(3)では、選定場所46か所を、空間の特徴と景観の特徴から設定した9つの分析項目を用いて、クラスター分析にて分類を行った。分析の結果、選定場所46か所は、「Ⅰ：境界をもつ内部的場所」、「Ⅱ：地域個性を形成する要素と場所」、「Ⅲ：河川と高台による低地部と高地部」、「Ⅳ：蛇行する河川と河川のかたちに沿った道路」、「Ⅴ：河川の橋上空間と橋のたもと(橋詰空間)」、「Ⅵ：開けた傾斜地の棚田」の6つの類型に分類された。

(4)では、6つの類型の選定場所の特徴と視点場となった選定場所の構成を分析し、「たんねのあかり」における視点場の類型を抽出した。6つの視点場の類型は、「1 内部景観(囲繞景観)を眺める視点場」、「2 文化的景観¹⁰⁾を眺める視点場」、「3 仰

瞰景と俯瞰景を眺める視点場」、「4 シークエンス景観を眺める視点場」、「5 視線が交差する視点場（見る-見られる関係の視点場）」、「6 眺望景観を眺める視点場」であった。これらの視点場はいずれも、谷根地区の特徴的な地形と、その地形を活かした人びとの生活と文化によってつくられた場所であり、地域の個性を形成する要素群を視対象として眺めることができる場所であると考えられた。「たんねのあかり」にて設定された視点場は、視点場から眺めることができる地域の個性を形成する視対象群とともに、谷根地区中心部の里地里山の地域の固有性を高める要因になると分析した。

第5章では、分析-1、2をもとに、谷根地区を事例とした里地里山の景観における視点場の役割について考察した。分析-1から地域の回遊性に焦点をおいて、①点在する文化的要素と視点位置、②経路形状と回遊性、③移動空間と滞留空間について考察を行った。分析-2から地域の固有性に焦点をおいて、①地域固有の景観と生活景、②地形の目利きと地域文化、③視点場の設定と地域の固有性について考察を行った。これらの考察を踏まえ、地域と視点場の関係に焦点をおいて、①里地里山の景観と地域住民と来訪者からみた視点場、②小盆地の回遊性と固有性、③視点場と地域の回遊性と固有性について考察を行った。以上から、谷根地区中心部を事例とした里地里山の景観における視点場は、地域の回遊性や固有性に関わり、地域のさまざまな視対象を眺め、観察し、地域を知るための視覚的な情報を得ることができる位置を、地域住民と来訪者に示すという役割があることがわかった。これらのことから、里地里山の景観における視点場の環境デザインは、里地里山の地域において人びとが生活と生業を営む上で、住まう地域の地形の目利き¹¹⁾にはじまり、地形を活かした地域文化を育むとともに、日常生活の中で形成される自然と人為の関係を構築する上で欠かせないものである。これは、「人と人の活動を取り巻く環境」、「視覚環境である景観」、そして「人」との関係のデザインであるといえる。また、地域における自然と人為の関係は、地域住民にとっては日常生活の中で身近な存在であるため、特別なものとして意識されにくい場合が多い。よって、地域住民と来訪者との協働の活動や交流を通じて多角的な視点をもつことができれば、地域での人と地形、自然と人為などの関係の中に、地域の固有性の意味や価値を見いだすことが可能である。地域内外の多角的な視点をもって地域に視点場を設定し、視対象となる地域の個性や特徴を表す文化的要素への視線を導くことは、地域の固有性を高めるために重要な方法である。そして、地域に視点場を設定する場合、起点と終点を同位置とし、道路空間や橋上空間などの移動空間に連続する公共的な視点場を設定することによって、地域の回遊性が形成される。地域の回遊性をもった連続する公共的な視点場を移動することで、人は地域の固有性を表す要素群を複合的に里地里山の景観の中に眺めることができる。回遊性と固有性は相互に影響しあい、地域の個性や特徴を形成する。

第6章結論では、「たんねのあかり」と谷根地区中心部を事例とした里地里山の景観における視点場の研究の結論を整理し、屋外公共空間への応用に向けた、「里地里山の景観における視点場の環境デザインに関わる要点」を抽出した。この要点は、「A. 里地里山の景観における回遊性」、「B. 里地里山の景観における固有性」、「C. 里地里山の景観における視点場」、「D. 里地里山の景観の視点場と地域の回遊性と固有性」の4項目に分類された12の要点で構成した。また、「里地里山の景観における視点場の環境デザインを行うにあたり重要な5つの項目」をまとめた。

第7章と第8章では、都市部の一つの地域として表参道周辺地域を事例として取り上げ、「里地里山の景観における視点場の環境デザインに関わる要点」と「里地里山の景観における視点場の環境デザインを行うにあたり重要な5つの項目」を用いて、里地里山の景観における視点場の環境デザインが、屋外公共空間にどのように応用できるのかを検証し、今後の課題と展望について述べた。地域を知って把握するための身体的、視覚的な体験を提供する環境デザインの方法として、回遊性をもった地域の経路と地域固有の景観に関わる6つの種類の視点場を設定し、都市部の一つの地域を事例とした屋外公共空間における検証例を提示した。検証の結果、本論文で提示した「里地里山の景観における視点場の環境デザインに関わる要点」と「里地里山の景観における視点場の環境デザインを行う

にあたり重要な5つの項目」を用いることによって、地域の視点場、回遊性、固有性に焦点をおいた、里地里山の景観における視点場の環境デザインを、都市部の地域における屋外公共空間の計画に展開する応用の可能性を示した。

註、引用・参考文献

- 1) 篠原修、他（著・編）『景観用語事典 増補改訂第二版』彰国社、2021 年、30-35 頁。
- 2) 内山久雄（監修）、佐々木葉（著）『ゼロから学ぶ土木の基本 景観とデザイン』オーム社、2015 年、18-20 頁。
- 3) 環境省「平成 27 年度版 環境・循環型社会・生物多様性白書（PDF 版）」、
<https://www.env.go.jp/policy/hakusyo/h27/pdf.html>（閲覧 2025 年 1 月 31 日）
- 4) 篠原修、他（著・編）前掲書（註 1）、167 頁。
- 5) 「使用場所」とは、「たんねのあかり」にて、イベント実施時に作品を配置して空間演出が行われ、実際に使用された場所を指す。
- 6) 「選定場所」とは、「たんねのあかり」を開催するにあたり、フィールドワーク調査を踏まえ、空間演出の対象の候補となった場所（候補場所）の中から、設定された条件を満たして選定された場所を指し、視対象にもなる場所である。
- 7) 「候補場所」とは、「たんねのあかり」において空間演出の対象の候補となった場所を指す。
- 8) 「囲繞感」とは、例えば、壁面や屋根などといった空間を感じる要素によって囲まれているような感覚を指し、囲まれ感とも表現される。

参考文献：

- ・ 内山久雄（監修）、佐々木葉（著）『ゼロから学ぶ土木の基本 景観とデザイン』オーム社、2015 年、69 頁。
 - ・ 篠原修、他（著・編）『景観用語事典 増補改訂第二版』彰国社、2021 年、46-47 頁。
- 9) 「見え隠れ」とは、視点の移動にともない、対象が建造物や樹木などの視線を遮る要素によって、見えたり見えなくなったりする景観の特徴を指す。また、空間演出の方法としても用いられる。

参考文献：

- ・ 日本建築学会（編）『建築・都市計画のための空間学事典 増補改訂版』井上書院、2016 年、115 頁。
- 10) 「文化的景観」とは、文化財保護法第二条の文化財の定義によると、「地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地で我が国民の生活又は生業の理解のため欠くことのできないもの」としている。

引用文献：

- ・ e-Gov ポータル (<https://www.e-gov.go.jp>) 「文化財保護法」、
<https://laws.e-gov.go.jp/law/325AC0100000214>（閲覧 2024 年 9 月 23 日）
- 11) 「地形の目利き」とは、ある対象物の良否や性質を鑑定するように、建築、都市計画、環境デザイン分野において、対象となる土地の地形から、その土地の特徴や性質を調査して把握することを指す。また、「地質の目利き」や「地形、土地を読む」とも表現される場合もある。『景観用語事典 増補改訂第二版』（前掲書、註 1、168 頁）では、「水田耕作を中心としたわが国の農村では、微地形をも含めた山や川の自然地形を目利きし、使い込み、さらにそれらを強調し、補完するために樹木・樹林を使うということを行ってきたのである。」といった記述例がある。

審査の結果の要旨

論文審査までの過程

南出倫子氏は、1995年3月に女子美術大学芸術学科デザイン科環境計画専攻を卒業し、建築事務所勤務ののち渡英し、1999年6月 University of East London, School of Architecture を修了した。帰国後は2002年4月より現在に至るまで、女子美術大学非常勤講師として環境デザイン専攻の専門科目や卒業制作のほか、全学対象の環境論の授業を担当している。また2009年6月よりクワッドデザインアーキテクツ一級建築士事務所を共同主宰している。

論文に関しては、女子美術大学研究紀要に『プレゼンテーションにおけるコミュニケーション能力の育成について ―環境デザイン分野の教育現場から』（第43号、研究報告、女子美術大学2013年3月31日発行）と『「浮遊感」を感じる空間演出の方法について ―「たんねのあかり」プロジェクトの実践を通じて』（第44号、研究報告、女子美術大学2014年3月31日発行）、およびデザイン学研究に『都市公園の園路歩行時に注視する視対象の類型と役割 ―相模原麻溝公園を事例として』（通巻272号、論文、日本デザイン学会2025年発行予定）がある。

審査は、まず令和7年11月5日に予備申請された論文に対して、標記審査員全員が、構成・図版・注釈などについての幾つかの指摘を行なった。それを受けて南出氏が論文内容の組み替え、加除、訂正を行ない、令和7年2月5日に提出された本論文をもとに最終審査が行なわれた。

論文審査

南出氏は「里地里山の景観における視点場の環境デザインと屋外公共空間への応用―アートイベント「たんねのあかり」の実践を通じて」の序論において、「質的向上を目指した、都市部の使われる屋外公共空間を計画するために、「たんねのあかり」の実践から得られた調査と分析内容を研究対象事例とし、里地里山の景観における視点場の環境デザインが、どのように屋外公共空間の環境デザインに応用することができるのか検証することを目的とした」と述べている。そして本論は、その探求を行うために研究対象地を新潟県柏崎市谷根地区として、「視点場」（視対象を眺める人の位置である視点の周囲の空間や状況）と「視対象」（視点から眺める対象）を調査することから分析をはじめている。そしてそれらの分析結果から、里地里山の景観における視点場の環境デザインが都市部をも含む屋外公共空間一般にどのように応用できるのかを考察している。

論文は全8章で構成されている。

第1章の序論に続いて第2章においては、研究対象地の新潟県柏崎市谷根地区谷根（たんね）地区中心部は、米山の裾に位置し、谷根川を中心とした低地と丘陵地に、田んぼと棚田や暮らしの場が集中している農村景観の基本構造をもった特徴的な地形であり、地域住民が自然の地形を目利きし、生活や生業を営む里地里山の集落であることが詳説されている。

第3章においては、アートイベント「たんねのあかり」の開催年ごとの使用場所の位置と特徴から見学ルートの経路形状を比較して、その分析結果から見学ルートの経路形状が、「回遊型」、「中通路型」、「回遊・中通路型」の3タイプとして分類できることが述べられている。

第4章においては、「たんねのあかり」の選定場所46ヶ所を対象とし、空間の特徴と景観の特徴から設定した分析項目によるクラスター分析を行い、その選定場所から6つの類型を抽出している。そしてそこから「視点場」を6つの類型に分類している。

第5章では、第3章と第4章の分析結果を踏まえ、回遊性、固有性、視点場に焦点を置いて、谷根地区を事例とした里地里山における視点場の役割について考察を行っている。

第6章では、「たんねのあかり」と谷根地区中心部を事例とした里地里山の景観における「視点場」の研究の結論を整理し、屋外公共空間での応用に向けた「里地里山の景観における視点場の環境デザイン」に関わる要点を抽出している。この要点は4項目に分類された12の要点で構成されている。

第7章では、「里地里山の景観における視点場の環境デザインの要点」と「視点場の環境デザインを行うにあたり重要な5つの項目」を用いて、都市部の一つの地域として表参道周辺地域を事例とし、里地里山の景観における視点場の環境デザインが屋外公共空間にどのように応用できるのか検証している。

第8章では今後の課題と展望として、里地里山の景観における視点場の特性を、都市部地域における屋外公共空間の環境デザインに展開する可能性を論じている。

以上本研究は、農村景観の基本構造をもった特徴的な地形を、回遊性、固有性、視点場という概念から記述し、それを都市部の屋外公共空間計画へ応用する可能性を探る意欲的な取り組みである。そのためには本論で試行された検証例を今後さらに積み重ねる必要があると思われる。しかし一方で、本論では豊富な図版資料、参考文献、さらには著者自身が主導したアートイベントの実体験に基づく多角的な考察が行われている。それによって公共空間を都市と農村に共通する生活の場として再評価するための独自の論考が展開され、本論の成果を環境デザインに応用する可能性は十分に導き出されていると言える。

以上の通りの論文の評価により、南出倫子氏の学位請求は、審査委員全員の合意をもって合格と判定された。

以上